エディトリアル

揖斐郡北西部地域医療センター センター長　吉村　学

特集

地域の現場に赴任して地域医療に従事すると，学びを続けることの難しさに直面することが多い．特に地域の中小病院や診療所・複合施設に勤務する医師や専門職種にとっては切実な問題である．今回の特集では英国にて提唱されたWork Based Learning（仕事に基づいた学び）を取り上げて，その考え方を具体的な事例をもとに考えていきたい[1]．そして地域医療に従事する専門職種にとっての学びをデザインする一助にできれば幸いである．

総論では，Work Based Learningの定義，その歴史的な背景，わが国における動向，エビデンス，地域医療現場での意味合いについて紹介する．

伊左次論文では，へき地に一人勤務医師として長期に赴任する場合の学びのかたちについて述べてある．へき地勤務の数だけ医療のかたちがあり，学びのかたちもあるがその根底部分では共通する原理や考え方が見えてくるのではないだろうか．

菅野論文では，地域に根差して長期間従事しているベテラン医師の学びのかたちを紹介している．“Teaching is Learning”をまさに実践しながら楽しんで仕事をされている様子が伝わってくる．ケアの継続性について言及しているところも地域医療の現場では大きな課題である．

島崎論文では，都市部で地域医療に従事しながら在宅医療にも力を入れて基幹病院との連携や学びのコラボレーションを実践している様子を紹介している．チームでの学び，特に在宅患者に関わるチーム内での学びを病診連携や病院専門医と協働して実践する姿は一つのモデルであろう．

澤論文では，英国で勤務する家庭医としてその診療の質をどう担保しているかを英国医療制度や英国家庭医学会の専門医制度の解説とWorkplace Based Assessment（職場基盤評価）を具体的に紹介している．Work Based Learningの目的は，各専門職の持続可能な成長を支援することによる診療の質改善であり患者のアウトカムの改善である．そのことを国を挙げて体系的に取り組んでいる英国の取り組みは大変参考になる．

木村論文では地域医療に従事する多職種の学びを支援してきた様子を具体的なノウハウを交えて紹介している．参考になることが沢山盛り込まれており，大変勉強になる．

目の前の患者，目の前の問題に対処して学びを続けるのが基本的ではあるが，今回の特集を通じて自らの学び，チームとしての学びを改めて考え直すきっかけになればありがたい．

1）Jonathan Burton, Neil Jackson: Work Based Learning in Primary Care. 2003, Radcliff Medical Press.